

## 浄土宗の教え・お念仏のこころ ①

まず最初は「浄土宗と他宗の違い」について、素朴な疑問から―

ご存知の通り、仏教には浄土宗以外に、天台宗・真言宗・禅宗・曹洞宗・浄土真宗等多くの宗派がありますが、各宗の違いはどのようなところにあるのでしょうか。

そもそも宗(しゅう)とは、「拠(より)所」或は「宗旨」の意味で、読誦(どくじゆ)する經典が違ったり、唱え方が違ったりということもあるのですが、根本的には教えの趣旨(しゆじ)が違(ちが)う訳であります。

では、浄土宗の教えの趣旨とはどのようなものでしょうか。端的にもうしあげれば、①何を目的とするか⇨極楽浄土への往生、②帰依する対象は⇨阿弥陀如来 ③何を実践するのか⇨称名(しょうみやう)念仏(ねんぶつ)ということになり、浄土宗の教えとは、「阿弥陀さまに帰依(きえい)して称名念仏を実践し、極楽浄土への往生を目指(めざ)す」教えということになります。

### ※仏の教えはたくさんある？

仏教には一般的に「八万四千」の法門(ほうもん)・仏の教えがあると云われていますが、どうしてそのような数になるのでしょうか。

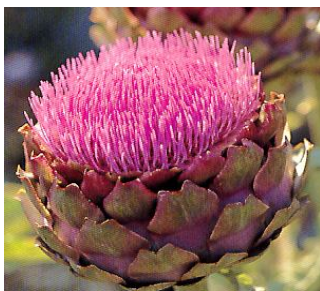
お釈迦さまは教えを求める人々に対し、その人の事

情や能力にに応じて、教えを説(と)かれました。例えれば、お医者さんが様々な症状の病人に対して、夫々(それぞれ)にに応じて薬を処方し治療するのと同じで、これを対機説法(たいきせつぽう)と呼びます。

その結果、多くの教えが説かれたわけです。中には互いに矛盾(むじゆん)するような内容もあつたりします。といつて、どちらかが間違(まちが)いということではありません。対機説法(たいきせつぽう)ですから、お釈迦さまがその人、その状況にに応じて、最も適切な教えを最も適切な表現で伝えただけなのです。

このような事情から、後に、多岐(たきに)に亘(わた)る經典の教えを整理し、お釈迦さまの本当に伝えたいことは何なのか、自分たちが実践すべき修行は何か、といったことを考える必要が生(な)じました。特に、インドから様々な經典がランダム(手当たり次第)に伝えられた中国では、その必要が強(た)かつたようです。こうして次第にさまざま

な「宗」が成立していきました。例えば、天台宗では先ほど述(の)べた經典間の矛盾について、お釈迦さまはさと



(朝鮮アザミ)

りを開かれてから亡くなる涅槃ねはんに入る、という  
までの間に教えを受ける人々の度合(どあい)に依じ  
て五段階に分けて説いた、というように捉え理解し  
たようです。

### ❖二本の道、二つの門

浄土宗の場合は、お釈迦さまが説かれた全ての教  
えを、大きく二つに分けて考えます。

一つは聖道門(しょうどうもん)、他の一つは浄土門(じ  
ようどもん)です。聖道門とは、この世で一生懸命  
修行してさとりを目指(めざ)す教えであり、浄土門と  
は、この世では直接さとりを目指さず、まず阿弥陀  
さまのお力によって極楽浄土に往生し、そこでさと  
りを目指すと言う教えです。

具体的に云えば、浄土門とは浄土宗を初め浄土真  
宗や時宗等の浄土系の宗派のことを、聖道門とは天  
台宗・真言宗・禅宗・日蓮宗など浄土門以外の全て  
の仏教。一タイやスリランカ等の南伝(なんでん)仏  
教を含めて「」を指します。つまり、今生きている  
うちにさとりを得ることを目指すのか、究極的には  
さとりを目指しながらも、先ず極楽浄土へ往生する  
ことを目的とするのか、という、目的を異にする二  
種の教えがある訳です。

そこで前葉(ぜんよう・前頁)上段の①②③の内容に

戻って考えれば、①の目的が全く異なる以上、②の帰  
依する対象も、③の何を実践するのかという点も、お  
のずと異なってきます。

聖道門諸宗では、自らのさとりを得るためにご縁の  
ある仏・菩薩(ぼさつ)さま等に帰依し、浄土宗では往生  
浄土を目的とするので、私たちを往生させてくださる  
阿弥陀さまに帰依をするのです。

実践する内容も、聖道門諸宗では自らさとりを得る  
ための行、即ち菩薩行を行ずることを目指します。

具体的に云えば、戒律を守り、精神を統一し智慧を磨  
くという、いわゆる三学(さんがく)ということになり  
ます。いずれにせよ、自らの力で直接さとりを目指す  
ので、これらは総じて難行(なんぎょう)であります。

是に對して浄土宗では、阿弥陀さまが本願で誓われ  
ている称名(しょうみやう)念仏を行います。称名念仏は  
南無阿弥陀仏と称(な)えたる念仏のことで、誰でも簡単  
に行ずることができるばかりか、阿弥陀さまの本願(ぼ  
ん)がんその修行時代に四十八の誓願をたて如来となられたに乗  
(じよう・衆生を乗せてさとりの彼岸に運び渡す意味で、本願とい  
う船に乗っての意)じその力を頂いて往生を目指すので易行  
(いぎやう)であります。

聖道門諸宗と浄土門との間にはこのような違いがあ  
りますが、では何故、聖道門と浄土門と言う二種の教

えがあるのでしょいか。そして法然上人は何故、浄土門の立場に立って「浄土宗」をお開きになったのでしょうか。往生を目指すのは、さとりを目指すよりも単に易(やさ)しい行であるからという理由でしょいか。

### ※現実には則した教え

それには法然上人の、時代に対する見方と人間に対する見方の二つを理解する必要があります。

法然上人以前の仏教では、様々な經典の中でどれが最も深い教え、高度な教えなのか、といった視点で優劣を決めていました。ところが上人は、「教えを選ぶに非ず、機をはからうなり」(『要義問答ようぎもんどう』)と述べておられるように、教え自体の優劣ではなく、どの教えが私達の置かれた現実と適合するのか、という視点で見えております。その「私達の置かれた現実」こそが、時代に対する見方と人間に対する見方に他ほかならないのであります。

先ず時代について見てみましょう。

法然上人が生きた平安時代の末から鎌倉時代にかけては、地震や竜巻、日照り、洪水等の天災が頻発(ひんぱつ)して屢(しばしば)飢饉に見舞われ、その上源平(げんぺい)の争乱が勃発(ぼつぱつ)して、世の中はひどく荒(あ)すさんでいた時代でした。

当時の悲惨な状況や荒んだ社会の有様は、鴨長明(かも

のちようめい)の『方丈記(ほうじょうき)』や芥川龍之介(あくたがわりゆうのすけ)の『羅生門(らしょうもん)』等に描かれている通りです。

この時代に先立つこと約百年、永承七(二〇五二年)より末法(まつぼう)の時代に入ったと云われています。

末法とは、お釈迦さま涅槃(ねはん)生死の苦界を去ること(仏高僧の死)のさとりの境地・迷いから自由となることで(仏教徒が目指すべき究極の境地)から時間の経過とともに、その教えも徐々(じょじょ)とゆっくりと、次第に(じ)に形骸化(けいがいか)・中身がなくなり形だけに變化することするという考え方で、涅槃後(ねはんご)しばらくの間は、教え自体も、それを実践する人も、それによつてさとりを得る人もいましたが、やがてさとりを得られる人がいなくなる像法(ぞうぼう)の時代を経(へ)て、もはや実践する人もいなくなつて(仏教が)形骸化する時代のことです。

(ウコン百合)

従つて、法然上人の在世当時は既に末法の世であつたわけ(は)です。

一握(ひとにぎり)りの上流貴族出身の者のみが榮達(えいだつ)の道を歩み、一方で僧兵達(そうへいだつ)が我が物顔に暴れ回るといふ当



時の叡山(えいざん・延暦七七八八)年天台宗の祖、最澄が延暦寺を建立以来、日本仏教の聖地となっていた。・南都(なんと・京の都)北都に対し奈良の都を南都という。仏教上は奈良に栄えた六宗の大寺を指す、因みに一般的にいられているのは、法相宗の興福寺・薬師寺などの大寺の状況は、まさに末法の世という実感をもたらしたことでしよう。さとり得るどころか三学(仏教徒が修めるべき三つの学問)戒(悪をやめ善を纏する)定(心)心(心身を静めて精神を統一する)慧(慧)え・煩惱を絶って真実を体得する)の三学のことの実践もままならない、このような末法の世にあつてどうしたら仏道を求めることができるのか。

法然上人はこのような時代意識を背景として、既存の仏教即ち聖道門諸宗の教えへの疑問を深め、その結果浄土門の教えに至ったのであります。

法然上人の「人間に対する見方」については、

次回にゆずることにいたします。



(姫サザンカ)

## 【温故知新】

「**観(かん)の目強く 見(けん)の目弱く**」  
劍豪 宮本武蔵

通常私たちは、自分の周囲を見渡して、肉眼で見えるものが実体(じつたい・本質、正体)であり、それで見えないものは何も無い、と考えがちですが、実は、肉眼で見えるものは実体の表層に過ぎず、見えないもののほうに寧(むし)ろ実体が隠されている場合のほうが多いようです。

例えば、容姿端麗な美しい女性を見て、「きれいだなあ」と一目惚れをし、近づいて交際してみると、案(あん)ん・考(かん)えに相違して人ずれがして厚(あ)かましい女性であったりして、当てが外れた等という経験をする場合があります。

是は自分が相手の外見を見ただけで、それが相手の総てであると勝手に思い込んだのがいけないのであり、自分の見方が最初から甘かったからで、裏切られた責任は、相手にあるのではなく自分自身にあります。

相手や物を見る場合には、その表面に見えるのは氷山の一角で、その下に隠されている実体を見極めるには、よほど活眼(かつがん・事物の道理を良く見通す眼力)を働かさねばなりません。そうした眼力を見開くことを江戸時代の劍豪・武蔵が言っている言葉です。